

入選

水が届けてくれた自然の声―鎌倉の砂浜とアカテガニ―

清泉女学院中学高等学校 二年 飯田 怜衣

私は、鎌倉の海と山に囲まれた街で育ちました。毎朝、海沿いを走る江ノ電という電車に乗り通学しています。私にとって、海は小さい頃から身近な場所です。夏には家族で稲村ヶ崎の砂浜で遊び、冬には海岸から夕日にそまる富士山を眺めました。そんな景色は、私にとって「当たり前」のものでした。

最近、その当たり前の景色が少しずつ変わってきたことに気づきました。子供の頃よりも、砂浜がせまくなっているのです。前はもっと広がったはずの砂浜が、今では、座る場所もなくなっています。最初は「今日はたまたま潮が満ちているのかな」くらいに思っていました。でも、テレビで気候変動や環境問題についてのニュースを観てから、これは海だけの問題ではないかもしれないと思うようになりました。そこで私は、鎌倉の街を流れている「水」に注目してみることにしました。

鎌倉には、大きな川はありません。街の中心を流れているのは滑川（なめりがわ）という小さな川です。山に囲まれた鎌倉の谷戸と呼ばれる谷からわき出た水が集まって、街を通り、海へと流れていきます。私は今まで、この小さな川が、あの広い砂浜と関係しているなんて考えたこともありませんでした。

調べてみると、砂浜の砂はどこからか急に出てくるわけではないことがわかりました。山に雨が降って、その雨水が岩や土を少しずつけずり、川がその土砂を海まで運びます。そして、波がそれを岸に打ち寄せることで、長い時間をかけて砂浜が作られるのです。つまり、砂浜は山から海へとつながる水の循環によって生み出されるのです。

しかし今、その循環がくずれています。私は実際に、近所の河口へ行ってみました。そこで母との会話に出た、昔の話を思い出しました。

「あなたたちが小さい頃は、河口近くの泥地に『アカテガニ』がたくさんいたよね」赤いハサミが特徴的なそのカニは、昔は鎌倉の川のいたるところで見られていました。しかし、私が見た今の河口は、護岸がコンクリートで固められ、カニが隠れられるような泥地はほとんど残っていません。砂浜がせまくなっているだけでなく、そこに住んでいた生き物たちも姿を消しました。その事実には、私はショックを受けました。インターネットで調べると、街を便利にするために川をコンクリートで整備したり、地面を舗装したりしたことで、山から海へ流れる砂や泥の量が減り、カニたちの居場所も奪われてしまったのです。さらに、気候変動による豪雨は、せつかくたまった土砂を一気に沖へ流してしまうことがあることも学びました。

水は、私たちが飲むためだけにあるわけではありません。カニのような小さな命を育み、砂を運び、私たちが大好きな景色を守ってくれています。鎌倉の海岸から砂浜が少しずつ消えていることは、身近な水の循環に何かが起きているという、自然から人間への小さな、知らせなのかもしれないかもしれません。

百年後の鎌倉の子どもたちにも、今の私と同じように裸足で砂浜を走ったり、波打ち際で遊んだりできる未来を残したいです。そして、いつかまた、河口に、たくさんのアカテガニが戻ってくるような環境を取り戻したいです。

普段、当たり前のように使っている水が、実は山や川、そして海や生き物へとつながっている。そのことを忘れずに、まずは自分に何ができるのかを真剣に考えていきたいと思います。